



写真：ヤクと共に駆けるチベットの人たち

Contents

巻頭言	1
特集：中国・インドネシア との学び合い	2
CODE 未来基金 NEWS	6
CODE 寺子屋レポート	9
プロジェクトレポート	10
食と国際協力	12
スタッフ活動記録・今後の予定	14
イベント案内	14
新型コロナウイルス、 私たちにもできること	14
会員・寄付者ご芳名	15
活動へのご協力をお願い	16

巻頭言「震災9年の東北に想う『最後のひとりまで』の個別性」

震災から9年を迎える東北の被災地を訪れた。被災地には、震災10年を前に、伝承施設が完成していた。そのいくつかを訪問して、驚いたことがあった。震災当時を思い出し、あらためてさまざまなことを考えさせられるものがある一方で、展示されている写真の中に、そこで写っている人間の顔にモザイクがかけられたものを多く見たからである。人と防災未来センターを含めた伝承施設において、少なくともご遺体をのぞいて、私はそのようなモザイク写真の展示を見たことがなかった。人間の顔は他の身体の部位に比べて特別な場所だと言われる。手足に比べて、顔を見れば誰かわかる。まさにその人の個性、かけがえのなさがあらわれているのが顔だ。だから、言うまでもなく、モザイクは顔にかけられる。もちろんプライバシーへの配慮は必要だろう。ならばきちんとした手続きを踏まえて、モザイクをかけることなく、承諾を得ながら展示できる写真を準備することはできなかったのだろうか。また、そもそもプライバシーの原義には、「奪われている」という意味がある。プライバシーで保護されることの裏面には、「かけがえのなさ」が奪われている状態がある、とも言える。そう考えると、このモザイク写真は被災地のこれまでを何か象徴的に表しているようにも思えてくる。「最後のひとりまで」というCODEの理念は、「そうは言っても限界がある」と、正しくても実現は難しいという印象をもたれることが少なくない。しかし、私は逆だと思う。「最後のひとりまで」における個別性を徹底的に追及した方が、実践を豊かにする可能性があるという現場の知恵がそこにあると思う。それは、モザイクに満ちた写真を展示する伝承施設と、ひとりひとりの顔がそこにある施設と、どちらがその被災地のこれからの生活、実践を豊かにする可能性を秘めているかを考えれば、明らかではないだろうか。

(CODE 副代表理事 宮本匠)



特集

中国・インドネシアとの学び合い

CODEのカウンターパートである中国の張国遠さん、インドネシアのエコ・プラウトさんが、2020世界災害語り継ぎフォーラムに参加するため来日されました。この機会にCODE寺子屋特別編を開催し、NGOの役割や自然との共生などについて学び合いました。

2020世界災害語り継ぎフォーラムに参加しました

2020年1月24日～26日、世界災害語り継ぎフォーラムが神戸市で10年ぶりに開催されました。事務局長の吉椿が実行委員を務め、分科会「語り継ぎと交流」で中国の張さん、インドネシアのエコさんと共に語り継ぎと交流について議論することができました。

張さんからは、災害支援や防災を通して海外の被災地と交流していくことの重要性について、エコさんからは、その土地の記憶を残した神話などの文化(アート)の力が災害の記憶の継承に大きな意味を持っていることが語られました。また、CODEからは、支援活動における海外の被災地との学び合いや交流の中で互いに気づきを得ることが、災害を語り継ぐことにもつながるのではないかと提起し、議論しました。



CODE 寺子屋特別編 第1回「中国のNGOの現状」(張国遠さん)

中国の災害対応における五つの問題

一つ目に、政府もメディアも重大な災害には注目するが、小さな災害にはあまり関心を示さない。最近武漢で起きた新型コロナウイルスに関する報道があるが、その前に実は二つ地震が起きている。そのことはあまり報道されないし、忘れ去られている。

二つ目に、災害が起きた時、中央政府は地方政府に対して強力なリソースや能力を使って救援をするよう通達するが、災害が起きるのはたいてい

地方の貧困農村なので、そのリソースや対応能力がない。災害が直接的に被災者の主体性を奪う一方、災害への脆弱性を改善するコミュニティの能力はなかなか向上しない。

三つ目に、政府は災害救援には注目し、注力するが、災害前の防災・減災には関心が低い。災害後の救援は「わかりやすい」が、災害前の備えは、その後災害が起きなければ効果が見えにくいのである。

四つ目に、政府は生命や財産に関しては重きを

置いているが、社会への損失についてはあまり考えていない。中国政府は、経済損失と死者数を災害対応における指標とする。そのため、災害後の対応では物資やインフラ整備等に重きを置かれ、文化や社会的弱者への支援が軽視されている。

五つ目に、政府は広域な災害には関心を示すが、局所的な災害には関心を示さない。洪水、干ばつ、凍結、土石流、森林火災などの周期的な災害が毎年起きているが、被災が局所的なので、地方政府も関心が低く、対応が不十分である。

各フェーズにおける政府の対応とNGOの対応

災害前、政府は地震救援訓練センターの建設など、基本的なインフラ整備を行う。ただし、発展している地区と貧困地区とで政府の能力や予算が異なるので、対応に差が出る。一方NGOは、家庭や学校で減災・防災の基礎的な知識の教育を行っている。特に災害弱者の災害対応に関心を注いでいる。

災害直後、政府は大量の資源を動員して、軍・警察が緊急救援に当たる。救助活動や、被災者の移転、避難所整備、食料・水・医療の提供などを行う。ただし、西部・西南部は政府自身も貧しいので、救援物資が不足することがある。対してNGOは、災害弱者の個別ニーズ(ミルク、車いす、生理用品など)への対応に注力する。例えば、政府が米などを提供しても、炊くための釜がない。NGOは釜やお椀、包丁などを提供する。

復旧・復興期に関して、政府は学校や病院などの公共施設の復旧にあたり、物理的に見えやすい部分への支援を行う。また、被災者のニーズではなく、計画に基づいて行うため、支援の重複や過不足が起きている。NGOが復興段階で大切にしているのは、コミュニティの能力と人間関係である。例えば高齢者・障害者への支援、子どもたちや遺族への心のケアなどに注力する。計画ベースではなく、被災者のニーズベースで対応するのが重要である。政府とNGOの災害マネジメントを見た時に、それぞれの長所・短所を補っていると見ることができる。



NGOの災害救援・復興における四つの課題

一つ目に、資源や資金が不足している。防災・減災の仕事は長期的なもので効果が見えにくいので、世間の関心を向けられていない。そのため資金獲得が困難である。

二つ目に、社会の中での信用が不足している。中国では救援の仕事は政府主導でやるのが一般的と考えられている。政府はトップダウンで、NGOはボトムアップでことを進めていくが、そこが難しい。時々、わいろや物資の横流しなどをしているNGOがあると、NGOへの社会的信用が低下する。

三つ目に、NGOはもっと専門性を学ばなければならない。2013年の雅安地震の時は、ボランティアがあまり準備をせずに被災地に行き、結局被災者になってしまった。また、チベットでは子どもの頭を触るのはお坊さんだけなのだが、玉树地震の時にそれを知らなかった中国のボランティアが子どもたちの頭を触ってそれが問題になった。現地の文化を知らなかったということだ。

四つ目に、NGOと政府の長所と短所を踏まえて、どのように協力関係を結ぶかである。ただ、ここ数年で状況は変わってきている。2017年に中国政府が防災・減災を推進する意見書を出した。それによって、四川NGO防災減災コーディネーションセンターができた。2008年四川地震の後、NGOがプラットフォームをつくり、ネットワーク組織で情報共有する仕組みができた。

張国遠(新安世紀教育安全科技研究院院長・NGO備災センター代表)

張さんは2008年の四川大地震直後、成都市で100のNGOが加盟する「NGO四川地区災害救援ネットワーク」のコーディネーターとして活動し、2011年に自らNGO備災センターを立ち上げ、仮設住宅などでの支援活動を展開してきました。2013年に再び四川省を襲った雅安地震を機にCODEは張さんたち四川のNGOと連携を深め、CODEが毎年、実施している「日中NGO・ボランティア研修交流事業」では、防災教育を行う現地の小学校などを案内していただきました。その後、「新安世紀教育安全科技研究院」を設立し、学校防災などに取り組んでいます。



CODE 寺子屋特別編 第2回 「社会や文化につながる建築」(エコ・プラウトさん)

自然と人間の調和

私は年齢を重ねるにつれて、建築はそれ自体が目的ではなく、一つのツールではないかと考えるようになった。どのようなインパクトを与えるかが重要だ。建築はコミュニティの上位に立つ物ではなく、あくまでコミュニティの一部である。いつもコミュニティに関わるときには、コミュニティから学ぼうと思っている。

かつて、文化の共有は普通に行われていた。今日では物事が非常に早く進んでいて、貧富、人種、信仰、年代、政治・経済…あらゆる面で分断が起きている。

ある仏教僧侶はこう語っている。「現代の私たちは眠ったまま歩いているようなものだ。何をしているのか、どこに向かっているのかは理解していない」。

また、ある文化史家は「私たちは自分自身にだけ語りかけていて、川には語りかけていないし、風や星の声を聴いていない。偉大な対話を壊して、そのことで世界を分断してしまっている。現在起きている災害は、精神的に閉じこもっていることの結果である」と語っている。

日本人の道徳家は「40～50年前まではここまでの自然破壊は起きていなかった。自然は私たちの目の前でまさに息絶えようとしている。私たちは地球が有限だということを理解しなければならない」と語っている。

しかし多くの人は状況にきちんと目を向けていない。地球には回復力があるという幻想を抱いて、現状に安住しようとしている。人間と「スピリット」との関係性を再構築することが重要である。「スピリット」はつまり、木、草、水、泉、湖、空、雲…至るところに宿っている。そこでの建築の役割とは何なのだろうか。

インドの建築家ドーシ氏に3回会ったことがある。初めて会った時、彼は言った。「変化を恐れずにはいけない。あらゆるものは変化する。我々は

蝶がいつ死ぬかは知っているが、山がいつ死ぬかは知らないだろう。しかし、あらゆるものは変化しているのだ」と。しかし2回目に会った時、彼はこう言った。「すべてのものが変化するわけではない。変わらないものもある。あなたが空や木々や母に対して持つ感情というのは変わらない」と。数年後、また彼に会った。私は彼に今の状況について話した。彼はこう言った。「衝突してはいけない。適合して話し合いをすることだ」と。

建築は日よけである

建築というのは、日光や、雨風、地震などから身を守る日よけのようなものだ。火山の噴火は常に起きている。自然のダイナミクスである。私たちが持っている能力を超えた偉大な力があることを理解しなければならない。心を強く持たなければならない。

自然を理解するという事は、私たちと自然との関係を断ち切るということではない。時間も、水も、風も、遮ってはいけない。自然に流れるものだから、流れに任せなければならない。

現在は工業的な材料にあふれているが、自然の材料のことをもっと理解しなければならない。農業文化が大事にしていることは、協働の精神、境界の緩やかさ、資源や知識の共有、自然の尊重である。一方現在の工業時代の価値観は、スピード・生産性重視、競争社会、経済ベースであり、自然を資源として扱っている。文化的な衝突が起きている。疎外、孤立、孤独な群衆、不信感が生じている。あらゆるものは商品にすぎないのだろうか？

使い捨ての文化では、食べ物がどこから来たのかも理解せず、分断された箱の中で生きている。つながりを意識していない。コミュニティや協働の考え方が消えつつある。ダライラマの言葉を用いれば、「コミュニティがなければ、人は一人きりでは生きていけない」。

コミュニティで取り組んだ建築プロジェクト

パプワのコミュニティセンター建設では、1996年の津波被害で失った地域のアイデンティティを再発見しようと、亀の甲羅型の屋根を設計した。

湿地での建設プロジェクトでは、そこに住んでいる人たちが湿地での建築手法をよく知っていた。基礎の造り方や使う材料など、そこの人たちのやり方を学び、そのやり方を用いた。

アートは人と人の関係を近くし、アイデンティ



ティを強くする役割を持っている。徳島県上勝町でのアートプロジェクトでは、現地の人たちとアイデアを出し合い、地域の材料を使った。ロープの作り方を知っていて教えてくれる人もいた。おばあさんと孫と一緒に作業する姿も見られた。高齢者が、子どもの時のおもしろい話を教えてくれたが、若い年代の人はその話を知らなかった。高齢者の中にある記憶が若い世代に伝わっておらず途切れているということだ。つくったアートは、世代間をつなぐ「時の橋」と名付けている。

オランダのプロジェクトでは、オランダとインドネシアの文化の対話を表現した。既存の白い建物の隣に、同じ大きさで形や材料の違う、コピーを建てた。建物の前に、大砲を模したものをつくった。かつて戦時中にオランダはインドネシアを攻撃するために大砲を使ったが、私はその記憶を違った形で表現することにした。この大砲は人を殺すのではなく、ハッピーにする。愛で人を撃つのだ。

エコ・プラウト (デユタ・ワチャナキリスト教大学教授、建築家、アーティスト)

エコさんは、ガジャマダ大学で建築を学び、その後、著名なインドネシア人建築家のYB Mangunwijaya氏に師事しました。2006年インドネシア・ジャワ中部地震後に、CODEと出会い、竹など現地の自然素材や伝統文化を尊重した建築を使った被災地での住宅再建を行いました。2018年のロンボク島地震やスラウェシ島地震津波、スダ海峡火山津波などでもCODEや現地建築家と共に復興支援に尽力していただいています。現在は、大学で建築やアートを指導する傍ら、海外の芸術祭などにも作品を出展しています。近年は、ジョグジャカルタ近郊の貧困地区でコミュニティ開発を住民と共に進めています。



番外編 エコさんと神戸を巡る

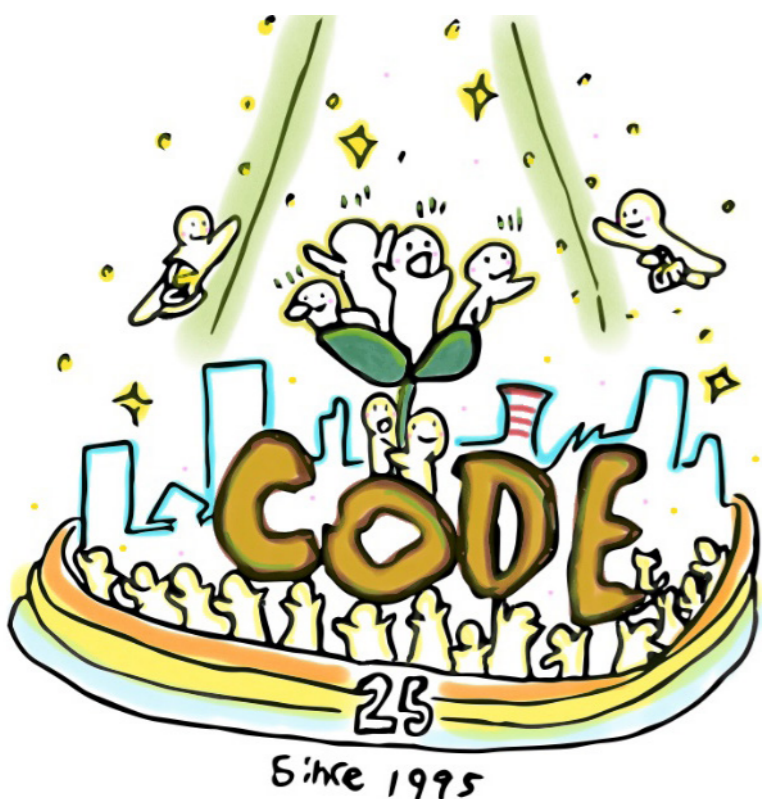
CODE事務所寺子屋を開催した1月27日、日中はエコさん夫妻とともに長田など神戸を見てまわった。仏具に興味があるということで仏具屋さんを訪れた後は、阪神・淡路大震災で被災した長田へ。村井理事が靴職人を務めていたケミカルシューズ工場があった地域では、村井理事の靴工場の様子や被災状況、復興住宅の話に興味深く聞いていた。特に、長田の住民たちの主導による復興住宅建設のお話や約1,000もの事業所が密集した靴生産の仕組みについて、村井理事にたくさんの疑問を投げかけていた。そこから、震災で火災が発生した鷹取や新長田の再開発地域、震災当時ボランティアが拠点としていた須佐野公園などを訪れた。雨風が強い日であったが専門とする建築だけではなく、まちづくりや産業、地域の文化にも熱心に目を向けるエコさんだった。(上野智彦)



CODE 未来基金 阪神・淡路大震災 25 年特別企画

若者の生き方を語る

— 阪神・淡路大震災から 25 年を前に —



未来基金で海外の現場に触れた "あの若者たち" と共に若者の生き方と次代の市民社会を考える

阪神・淡路大震災から 25 年を迎えた 2019 年度、CODE は次の 25 年を担う若い世代をどう盛り上げていくかということを考え、若者を中心とした講演企画を開催しました。未来基金のフィールドワークで海外の被災地を訪れた若者たちをゲストスピーカーとし、彼らが海外の現場で何を感じ、今どのような生き方をしているのかを語っていただく連続シリーズです。

ゲストスピーカーとなる若者たちは、未来基金での経験を経て、それぞれの分野で非常におもしろい取り組みをしています。そして彼らの取り組みは、私たちの暮らしや社会課題に密接に関わっています。彼らのお話から、「自分にも何かできるかもしれない」というヒントを学び、震災から次の 25 年をつくっていくための「もう一つの生き方」を考えました。

今回の CODE Letter では、シリーズ後半となる第 3 回、第 4 回、第 5 回の開催レポートをお届けします。

各回のテーマ

第 1 回 「お金に依存しない自立した生活を目指して」

2019 年 10 月 27 日 (日) 講師：久保陽香 (「非電化工房」住み込み弟子)

第 2 回 「学生のやりたいを見つける」

2019 年 11 月 17 日 (日) 講師：羽田和真 (NPO 法人 The Peace Front スタッフ)

第 3 回 「コミュニティナースが取り組む地域支援」

2019 年 12 月 22 日 (日) 講師：立浪雅美 (尼崎市「園田南」地域包括支援センター保健師)

第 4 回 「昆虫食で世界の食システムに挑戦する」

2020 年 1 月 19 日 (日) 講師：西本楓 (株式会社 BugMo 共同創業者、COO)

第 5 回 「若者の生き方について考える」

2020 年 2 月 9 日 (日) 講師：金益見 (神戸学院大学講師)

開催レポート Vol.2

第 3 回

「コミュニティナースが取り組む地域支援」

2019 年 12 月 22 日 講師：立浪 雅美

講師の立浪さんは、尼崎市の保健師としてお仕事をされる一方、「人とつながり、まちを元気にする」コミュニティナースとして様々な活動をしています。学生時代に保健師を志して看護大学に進学。それを一度やめて国際ホテル科で学び直し、ホテルでの仕事を経て、再び看護大学に入り直すという、ユニークな経歴をお持ちです。

「生活を知る」をテーマに参加した未来基金のネパールフィールドワークでしたが、当初、村の医療スタッフに、思わず医療のことばかり質問攻めにしてしまいました。それを反省し、翌日は野草を採る女性にくっついていき、お家で食事を共にしたそうです。村の医療スタッフは、医療を提供するだけでなく、時には土掘りをするなど、地域に入って生活をしていました。その姿から、地域の一員として、地域と共にある専門職のあり方を学んだそうです。

尼崎市では、お寺でのワークショップや、「看取り」がテーマのフェスといったイベントの企画、コミュニティナースとして服屋の店頭立つ「実験」などに取り組んでいて、今後も「コミュニティ×〇〇」を増やすおもしろい仕掛けづくりをしていきたいとのことでした。

会場からは、医療職の方や尼崎市民の方、看護の学生さんなど様々な方に質問・コメントをいただきました。



第 4 回

「昆虫食で世界の食システムに挑戦する」

2020 年 1 月 19 日 講師：西本 楓

講師の西本さんは、昆虫プロテインバーを製作・販売している株式会社 BugMo の共同創業者であり、COO (最高執行責任者) をしています。学生時代に訪れたウガンダで、子どもたちがトウモロコシを溶かしたものと豆だけの食事をしてきたことを目の当たりにし、もっと安価で栄養のある食べ物は無いのだろうか、食に関心を持ったそうです。

未来基金では中国・四川省を訪問し、医食同源の文化がしっかり残っていることを実感しました。また、村おこしをフィールドワークのテーマにしていたものの、簡単には何も変えられないということを痛感する一方で、丁寧に人と向き合えばその瞬間はつながれるということも学びました。

ラオスでは、自然に生活の一部に昆虫食が取り入れられていることも知りました。現金収入が少ないことや栄養不足といった問題に対する、昆虫養殖の可能性を感じたと西本さんは言います。一方で、もともと好きで「愛でる」対象だった昆虫を、ビジネスの対象とすることへの葛藤なども語られました。

会場との質疑では、昆虫食をより普及させるための課題や工夫、昆虫食を通じた食問題や教育へのアプローチ等について議論しました。



「若者の生き方について考える」

2020年2月9日 講師：金 益見

講師の金さんは、神戸学院大学で学生の教育に携わっています。自身の学生時代の経験や、これまでに出会った「カッコいい大人たち」のエピソードなどを交え、「若者」たちへのメッセージを語っていただきました。

高校時代、母親からの、「表現活動は何でも、内にあるものがあふれ出すことだ。内にためなければいけない」という言葉を受け、大学のサークルやゼミの選択でも「自分にはないもの」のインプットを求めて積極的に人に会いに行ったそうです。

「いいと思ったことは言葉にして言う」、「誰かのため、という気持ちがあると自分の殻を破れる」、「カッコいい／カッコ悪い大人に（直接）会う」、「今を生きるのか、ちょっと先を考えるのか、その時々で選んだらいい」、「行動を続ける、自分と向き合い続ける」など、迷える「若者」にも、進みたい「若者」にも、勇気の出るメッセージをたくさんいただきました。

金さん自身も夢を追い続けていると言います。最後は金さん自ら作った歌を歌っていただき、まさに「ライブ」な2時間となりました。



シリーズを振り返って ～それぞれの立場での丁寧な取り組みが、災害に強い市民社会をつくる～

阪神・淡路大震災 25 年前に、震災を経験していない私たち若者が、どのように震災を振り返り、何を受け継いでいくべきかを考えさせられました。その中で、震災をきっかけに発足した CODE の未来基金に参加した若者が、海外の被災地で何を感じ、考え、それぞれの生き方につなげていこうとしているのか、とても関心がありました。スピーカーの4人の若者は、未来基金のフィールドワークを通じて中国で体感した循環する暮らしや、フィリピンで感じた人のあたたかさ、ネパールで気付いた人として関わることの大切さをきっかけに、それぞれが悩みながら「もう一つの生き方」を模索していました。

震災から生まれた KOBE の活動が、分野を問わず、若者の生き方を考えるきっかけになっていることを実感し、どの立ち位置にいても、目の前のことに丁寧に取り組んでいくことが、災害に強い市民社会にもつながっていくのではないかと感じました。また、それぞれの分野に関心が高い方々など、新しいつながりもでき、世代や分野を超えて学び合う場の重要性も感じています。関わっていただいた皆様、ありがとうございました。

(武庫川女子大学／ボランティアスタッフ 原田梨央)



フィリピンの子どもたちと原田さん



どうせ人生死ぬまでの
長い暇つぶしなんだから
好きな事しよう 好きな子としよう

CODE 寺子屋 阪神・淡路大震災から 25 年 四半世紀の歩みと "いま" —NGO・市民社会・災害支援のこれから—

阪神・淡路大震災 25 年前にした 2019 年 12 月 8 日、この 25 年を「NGO、市民社会、災害支援」の 3 つのキーワードから振り返る鼎談を開催しました。それぞれの分野の最前線を走ってきた 3 名からのメッセージを受け、会場の参加者と共に次の四半世紀に向けた課題と、解決に向けた道筋を探りました。



CODE の原点 芹田健太郎 (CODE 前代表理事)

我々の活動の原点は、痛みの共有だった。震災直後に起きたサハリン地震。我々は「何とかせなあかん」と言ってどこよりも募金や物資を集めた。行政も我々も、被災者であり、公を担っているという点は一致していた。それらの感覚は、今はひょっとしたら消えているかもしれない。「最後の一人まで」というのは、救助のヘリコプターが最後の一人を吊り上げるまでみんなが見守るといふ、具体性を持ったもの。それは費用対効果という考え方ではない。我々は「税金を払っているのは私たちだ」と、「最後の一人から発想せよ」と声を上げなければならない。



ボランティアの発展と形骸化 室崎益輝 (CODE 代表理事)

1995 年がなぜボランティア元年なのか。それは、阪神・淡路のボランティアが、個人の自由な意思で参加したこと、社会変革と結びついたこと、人と人との直接のつながりがあったことからである。25 年を経て、ボランティアの受け皿や調整役というシステムは整ってきたが、同時にそれが形骸化している。ボランティアの敷居が高くなり、社会の余裕がなくなり、ボランティアが激減している。今は次の脱皮に向けて苦しんでいる時期だ。ボランティアの原点である、困っている人がいれば助けること、被災者のニーズに寄り添うことを再確認したい。



新しい市民社会の今 松本誠 (CODE 前理事)

震災の後、被災者、ボランティア、自治体の三者がそれぞれに新しい時代を模索していた。地域に、自分たちのくらしは自分たちでつくるという考えが芽生え、それを担う新しい主体としての地域組織や NGO・NPO が生まれた。しかし、その動きはまだ緒に就いたばかりである。新しい市民社会の方向性は示したが、それを広げ、定着させ、仕組みをつくるには至っていない。行政だけの責任でなく、市民自身が学び、運動を広げる努力をしていく必要がある。たった 2～3% の人でも声を上げ、行動すれば、それに呼応する人が現れ、世の中は変わるのだ。



講義録の小冊子のご案内

この鼎談企画の講義録を小冊子にまとめました。震災 25 年と CODE の理念のエッセンスが詰まった小冊子です。3 名のメッセージから学び、次の 25 年の社会と一緒に考えませんか？ご希望の方には実費で頒布いたしますので、CODE 事務局までご連絡ください。

中国・新型肺炎救援プロジェクト (報告：吉椿雅道)

2019年11月頃より中国湖北省武漢市で発生したコロナウイルスによる新型肺炎ですが、武漢市で感染拡大が深刻化したことから、CODEは2020年2月4日に救援プロジェクトを立ち上げました。2008年の四川大地震以降、連携しているカウンターパートのNGO備災センター(新世紀教育安全科技研究院：四川省成都市)の張国遠さんからの緊急要請があったことでCODEも救援を開始するに至りました。



封鎖された武漢の街

張さんたちは、封鎖された武漢市に医師を派遣し、そこからのニーズとして医療機関でマスクや防護服、ゴーグルが不足しているのを、日本から支援して欲しいかとのことでした。しかし、その後、日本でも感染が拡大し始めたことからマスクが手に入らない状況が起き、現地に託す寄付を募り、武漢の情報を発信するに留まっていました。



中国全土でマスク不足に

学び合い—市民の力と安心・安全—

その後、大阪大学の渥美公秀教授、大阪大学未来共創センター災害ボランティアラボと共に新型コロナウイルスに関する学習会を開催し、中国、台湾との学び合いが実現しました。この学習会を開催するに至ったのは、張さんたちが支援する武漢で、感染した家族を隔離したことによって子どもが餓死したことや、回復者が地域に戻った際に差別や偏見を受けていることを聞いたことがきっかけでした。このような問題は、いずれ日本や他の地域で起きるかもしれない。だから先を行く武漢から学ばなくてはならないと思います。

中国の張さんたちは、「NGOやボランティアは高齢者、子ども、障がい者、妊婦を注視しなくてはいけない。社会(市民)の力を結集することが重要だ」と語っていました。また、台湾では早い段階で政府が対応したことで感染がある程度抑えられています。「その背景には、WHO(世界保健機関)から排除されていることで独自でやるしかないという覚悟と、市民やメディアによる政府へのプレッシャーが情報開示につながったことがある」と、李フシンさん(京都大学)は報告してくれました。中国や台湾共に、政府任せにするのではなく、市民や社会の力を発揮し、いかに安全・安心を確保するかが語られたように思いました。



オンラインで大阪会場(上)と中国をつないでの学習会

オンラインボランティア

封鎖している武漢に入れるのは医療関係者のみで、張さんたちNGOも現地入りがかないませんでした。そこで張さんたちは、救援ネットワークCEER(Civil Engagement in Emergency for COVID-19)を立ち上げ、インターネットを活用した「オンラインボランティア」の支援活動を開始しました。ボランティアたちが、10のチーム(ボランティア調整、海外調整、情報、アクション、広報、プロダクト、物流、心のケアなど)にそれぞれ加入し、それぞれの専門や特技を活かして活動しています。現在、中国各地のNGOやボランティアなど約700人が登録しています。そのうち約100人が武漢在住のボランティアたちです。封鎖され外部の支援者が入れない状況から、結果的に武漢の市民たちがボランティア(アクションチーム)として自主的、主体的に動いていきました。



武漢のボランティアによる物資運搬



障がい者への物資提供

「COVID-19国際アライアンス」の設立

大阪大学での日・中・台の学び合いを機に、中国の張さんからこの新型コロナウイルスに関する民間のアライアンスを作る提案があり、渥美教授、吉椿は呼びかけ人として、CODEはメンバーとして参加することになりました。定期的にネット会議を開催しており、中国、台湾、日本、インド、フィリピン、スリランカ、パキスタン、メキシコなど各国のNGOなどの取り組みをこの場で共有し、各地の現場で活かすことを目的としています。武漢

のNGOは、妊婦や独居の高齢者、ホームレスの方の支援を行っており、これらの取り組みは今後、各地で非常に参考になると思われます。コロナウイルスによる危機は、人類に課せられた世界共通の課題です。今、まさに国を超えた市民の連帯が必要とされています。

International Alliance for COVID-19 Community Response (IACCR)

HP : <http://iaccr2020.net/>



ネパール連邦民主共和国

面積 北海道の約1.8倍
 人口 約2,860万人(2019年)
 首都 カトマンズ
 民族 インド・アーリア系とチベット・ミャンマー系
 約100民族
 言語 ネパール語
 宗教 ヒンドゥー教、仏教、イスラム教など
 産業 農林業、観光業など
 通貨 ネパール・ルピー



第57回 12月13日

ネパールから見た日本

語り手：山本健一さん (CODE 賛助会員)

第57回のテーマは、ネパールです。CODEは2015年の地震の後、グデル村で耐震モデルハウスの建設を通じた住宅再建支援などを行いました。

語り手の山本健一さんは、仲間たちとともに、年2回ネパールを訪問して物資提供や小学校建設などのボランティア活動をしています。2016年に訪問した際は、630kgの物資を日本から持って行ったそうです。国全体の42%の人が、1日150円以下の収入で生活しているというネパール。子どもたちには、

特に上靴や体操服、赤白帽、ぬいぐるみなどが喜ばれるそうです。38歳の時に2週間南米に滞在したのが人生の転機だったという山本さん。しかし、ネパールではもっと人生観が変わり、今や移住したいほどだと言います。仲間の古川さんがまとめてくださった現地訪問の様子の動画も見ながらお話を伺いました。

今回の食は、ネパールカレーです。山本さんアレンジのスパイスが、とても美味でした。



ネパール料理 カレー



山本さん(右)と、仲間の古川さん

第58回 2月20日

バクタブルの再開から学ぶ～地震から4年半を経たネパール～

語り手：モハン・パントさん (ブルチャンバル大学クワパ工科学院教授)

第58回のテーマは、前回に続いてネパールです。語り手のモハン・パントさんは建築の専門家であり、2015年のネパール地震の後にCODEが取り組んだ耐震モデルハウスの建設において、設計や専門家派遣などで協力してくれました。

今回は、歴史都市であるバクタブルとパタンの保存と再開についてお話いただきました。歴史都市は、建物の老朽化と安全性の問題や、過密等に起因する住環境の問題などを抱えているそうです。そこで再開の計画では、これらの問題の解消と、

既存の住宅構造やコミュニティ、歴史的な遺産の保全との両立が図られました。建物の構造や生活様式のベースに仏教信仰があるという違いはあるものの、過密都市での地震対策の問題や、まちづくりにおけるコミュニティや文化の保全の問題は、日本でも共通しています。

今回の食は、ダルバート(豆スープ、ジャガイモとチンゲン菜のカレー炒め、ご飯のセット)です。パントさんお手製のアチャール(ジャガイモの漬物)と一緒にいただきました。



モハン・パントさん(右)



ネパール料理 ダルバート

イラン・イスラム共和国

面積 日本の約4.4倍
 人口 約8,000万人(2016年)
 首都 テヘラン
 民族 ペルシャ人、アゼリ系トルコ人、クルド人、アラブ人等
 言語 ペルシャ語、トルコ語、クルド語など
 宗教 イスラム教(主にシーア派)、キリスト教、ユダヤ教、ゾロアスター教など
 産業 石油関連産業など
 通貨 リアル



第59回 3月19日

イランという国～メディアからは伝わらない話～

語り手：奥圭三さん、ナヒド・ミールザハリリさん

第59回のテーマは、イランです。CODEは2003年のイラン・バム地震の後、幼稚園支援、「しあわせ運べるように」を使った防災教育、コミュニティセンター建設、耐震実験などの支援を行いました。

語り手の奥圭三さんは、2001年に初めてイランを訪れました。直後に起きた9.11テロの後、日本で報道されることとイランの実際の姿にギャップがあると感じたそうです。近代的な建物、広い住宅、欧米スタイルのファッション、コメディ好き、家の中での女性の姿など、イランの市井の人々の普段の暮らし

を教えてくださいました。

アメリカとの緊張関係も報じられていますが、「そのような日でも、人々の日常は変わらない」という奥さん言葉が印象的でした。ナヒド・ミールザハリリさんからも、イラン人目線で、国際情勢に対する考えが語られました。メディアからは伝わらない、その国のありのままの姿を知ることの大切さを再確認しました

今回の食は、ルビヤ・ポロー(いんげん豆とトマトペーストの炊き込みごはん)です。日本人にもなじみやすいお味で、大変好評でした。



イラン料理 ルビヤ・ポロー



奥さん(右)とナヒドさん

食と国際協力は

「〇〇(と) × 国際協力」 にリニューアルします!

「食と国際協力」は2014年にスタートし、「食」をテーマに様々な国の暮らしや文化を学ぶ場として、これまで59回開催してきました。

2020年度より「〇〇×国際協力」と題して、企画をリニューアルします。「〇〇×国際協力」では、毎回異なるテーマ設定でゲストスピーカーに語っていただき、参加者と共に国際協力について考えます。

※隔月で開催

第1回は…「映画 × 国際協力」! 5/15(金)

台湾映画「セディック・バレ」をテーマに、ゲストスピーカーが解説し、その背景にある国際情勢や社会課題について参加者と考えます。

👉 詳細は「イベント案内」(P.14)をご覧ください。

スピーカーを募集します!

「〇〇×国際協力」で、独自のテーマでお話しして下さる方を募集します。自薦・他薦は問いません。

テーマ例

農業、映画、音楽、本、職 etc.

スタッフ活動記録・今後の予定

活動記録	
2/21	CODE 理事会
2/22	災害医療フォーラムに参加 (吉椿)
2/27	関西国際大学外国人研修で講義 (吉椿)
3/3	大阪大学渥美教授、NVNAD 寺本さんと新型コロナウイルスの協議 (吉椿)
3/4	姫路で講演「メコン川流域の文化とくらし」(吉椿)
3/9	大阪大学新型コロナウイルスの学習会 (第3回) で報告 (吉椿)、参加 (室崎代表理事、上野、立部)
3/18	大阪大学新型コロナウイルスの学習会 (第4回) に参加 (吉椿、立部)
3/19	第59回食と国際協力「イラン」を開催
3/25	新型コロナウイルスの国際アライアンス (IACCR) 第1回会議で報告 (吉椿)
3/27	大阪大学新型コロナウイルスの学習会 (第5回) に参加 (吉椿)
4/3	新型コロナウイルスの国際アライアンス (IACCR) 第2回会議に参加 (吉椿、上野、立部)
4/10	新型コロナウイルスの国際アライアンス (IACCR) 第3回会議で報告 (吉椿)
4/13	CODE 理事会
今後の予定	
4/16	関西 NGO 協議会加盟団体の新型コロナウイルスの情報共有会で報告 (吉椿)
4/21 ~	神戸学院大学「ボランティア論Ⅱ」で講義担当 (吉椿)
4/24 ~	神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義担当 (村井)
4/27 ~	親和女子大学「国際ボランティア論」で講義担当 (吉椿)
5/15	映画と国際協力開催 (下記)
5/26-27	福井大学で講演 (吉椿)
6/13	CODE 理事会・総会

イベント情報

映画×国際協力 ～台湾の原住民を考える(仮)～

「〇〇×国際協力」へのリニューアル第1回は、「映画×国際協力」です。映画「セディック・バレ」を題材に、台湾の原住民の歴史について学びます。
※新型コロナウイルス感染症の状況により、日程等が変更になる可能性があります。

日時：2020年5月15日(金) 18:30～20:00
会場：CODE 事務所
語り手：宮本匠 (CODE 副代表理事/兵庫県立大学大学院准教授)
参加費：500円 (飲み物、茶菓子つき)



新型コロナウイルス、私たちにもできること

新型コロナウイルス感染症について、「こんなことで困っている人がいる」「自分にもできることはないか」「こんな取り組みをやっている」という声を、CODE 事務局までぜひお寄せください。CODE は世界各地の取り組みから学び、自分たちの地域で活かすための情報発信などを行っています。今こそ世界の市民で助け合い、この困難を乗り越えましょう。

私たちにもできること—募集中!—

アルコール消毒液… いま最も厳しい状況にある医療機関や軽症患者の受け入れ施設に届けます!
翻訳ボランティア… 世界各地の状況や取り組みを日本語に翻訳し、日本のみなさんに発信します!
自分の住むまちで… 自宅マンションで高齢者の買い物サービスや安否確認を始めた人もいます!

会員・寄付者ご芳名 (50音順、敬称略) 2019/12/19~2020/4/9

【会費】

青木クリニック 青木正美、池見宏子、石田和子、井出賢、井藤清美、井上力、井上由紀子、黄貞順、大津暢人、北浦和志、久保陽子、黒瀬晴世、越山健治、小林孝信、小林アイ子、斉藤茂樹、塩田明子、島田誠、白水土郎、

生活協同組合コープこうべ、高水一成、武田節子、竹代一洋、田中一正、長澤行政書士事務所 長澤雄二郎、兵頭晴喜、紅谷昇平、松下隆文、水平企、村田昌彦、安富信、山岸周平、山崎清

【ご寄付】

渥美公秀、安部知子、飯干大嵩、池見勝己・宏子、石井松太郎、石田和子、石本賢司、伊勢正、市橋純子、井出賢、井上節子、井上力、井上由紀子、今村雅子、植田麻紀、宇田川規夫、宇津呂賀代子、大崎順子、大西佑季、岡本千明、岡本善弘、奥山隆生、春日千明、紙徳真理子、亀田彩子、河崎紀子、関西大学、神原佳子、岸野春子、北浦和志、北野真祐子、木下洋子、清須賢、桐島道衛、黒瀬晴世、黒川能孝、小泉桂子、株式会社神戸新聞社、小林アイ子、小林生治、斉藤茂樹、佐々木康治、佐藤和子、澤田安弘、塩田明子、塩田裕成、師玉健男、白水土郎、生活協同組合コープこうべ、生活クラブやまがた生活協同組合、高橋美穂子、

高見邦雄、高水一成、瀧川裕康、竹本了悟、田辺エツ、塚本謙三、都司恵理、津田秀子、土本基子、土山和子、中川寿子、中里一実、長澤行政書士事務所 長澤雄二郎、永松伸吾、日本基督教団名古屋中央教会、羽島新菜、橋本京子、秦 智、林昌平、林ひさ子、日比野恵子、日向真紀子、兵頭晴喜、藤井正一郎、藤田、古川敬司、紅谷昇平、堀江愛、増田未知子、松下隆文、三浦真里子、水平企、三井さよ、宮前峯子、村田昌彦、室崎益輝、めふコープ委員会、木馬の会、モハン・パント、八尾高伸、山岸周平、山崎清、山下和哉、山本博子、山本正紀、祐川寺、吉田尚史、吉野恵子、和田幹司、渡邊貴浩

— CODE Supporter's Voice —

賛助会員 山本健一さんより

6年前に私の地元のOさんと丹波豪雨災害の支援に行った。彼女が私をCODEに引き合わせてくれた。その後、私はネパール大地震の支援も始めた。「ネパールに行く支援、それはどんな意味があるの」と聞く人がいる。「一緒に行ってみましょう」と答える。一緒に行った10人以上の知人がほとんどネパール・リピーターに

なった。支援は何かをしてあげるといふ気持ちを超えて、自分の日々の生き方を考える場になる。私の人生観も変わった。災害支援に国境はない。私はCODEの活動に共感している。CODE 賛助会員拡大キャンペーンが私の今年の課題。半年で新規会員が30人増えた。コロナ問題があってもこれは続ける。

山本さん、いつもありがとうございます!

編集後記

このCODE Letterの編集を進めながら、ますます新型コロナウイルス感染の状況が厳しくなっていく日々です。コロナ禍という災害で、私たちは改めて人との関係や社会の在り方を問われています。震災25年を前にした鼎談で、登壇した3名が今の社会に投げかけたこと。人の痛みをわがことと感じて動いているだろうか。人と人とのつながりを意識できているだろうか。困っている「たった一人」の言葉に寄り添っ

ているだろうか。自ら学び、運動を広げる努力をしているだろうか。ウイルスというハザードは未知ですが、襲われているのは他ならぬ私たちの社会です。周りに目を凝らし、過去や他者の経験から学べば、できることは確かにあります。震災25年で学んだことを改めて振り返り、世界との、となりにいる人との、つながりを考えねばと思います。

(アルバイトスタッフ 立部知保里)

ご寄付のお願い

CODEの活動を継続するために皆さまのご寄付を募っています。救援プロジェクトへのご寄付は25%を上限としてCODEの管理運営費に使わせていただいております。ご協力をお願いいたします

入会のお願い

私たちとともにCODEの活動を担っていく会員を募集しています。

【正会員】

CODEの意思決定に参加し、活動に積極的に関わっていただく会員です。総会での議決権を有します。

個人・学生： 年会費 5,000 円 × 1 口以上
NPO/NGO： 年会費 5,000 円 × 1 口以上
企業・団体： 年会費 30,000 円 × 1 口以上

【賛助会員】

CODEの活動に賛同し、資金面で継続的にサポートしていただく会員です。

個人・学生： 年会費 2,000 円 × 1 口以上
NPO/NGO： 年会費 2,000 円 × 1 口以上
企業・団体： 年会費 10,000 円 × 1 口以上

ボランティア募集

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などのボランティアを募集しています。詳しくはCODE事務局までお問合せください。

お振込み方法

※通信欄に用途をご明記ください。
(例「新型コロナ」「賛助会員」)

【郵便振替】


加入者名：CODE
口座記号番号：00930-0-330579

【銀行振込】

■ ゆうちょ銀行
支店名：〇九九（ゼロキウキウ）
支店番号：099
口座番号：0330579（当座）
口座名義：CODE

■ 近畿労働金庫
支店名：神戸支店
支店番号：642
口座番号：8881040（普通）
口座名義：CODE 海外災害援助市民センター

【クレジットカード】

CODEのホームページより ⇒ 
<http://www.code-jp.org/cooperation/index.html>

講演会・報告会派遣

講演会、報告会を開催してみませんか？あなたの住んでいる地域で開催される講演会にCODEのスタッフを講師として派遣します。お気軽にお問合せください。現在、コープこうべ、近畿労働金庫などでも講演をさせていただいています。

CODEとは？

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で、KOBE（阪神・淡路大震災のすべての被災地を指します）は世界70余りの国々から支援を受けました。その後「困ったときはお互い様」の想いから、世界各地の災害を支援しようと市民による救援活動が活発化してきました。

KOBEの経験と知見を活かし、幅広い智恵や能力をもつ企業、行政、国際機関、研究機関、NGOなどを含めた市民の集まる場として2002年1月17日にNPO法人として発足したのがCODE海外災害援助市民センターです。

CODEは前身となる阪神大震災地元NGO救援連絡会議の時期も含め、これまで63回の救援活動を行ってきました。「最後のひとりまで」の理念を胸に、「寄り添いからつながりへ」人間復興となる救援を実践しています。

CODEは2020年4月現在、アフガニスタン、中国、ネパール、インドネシアでの救援プロジェクトを実施しています。インドネシアでの子どものためのスペースづくりやアフガニスタンでのぶどうプロジェクトなど、長い目で見た支援を「最後のひとりまで」という理念を持ってKOBEから世界の被災地へとどけています。

また、CODEの活動を未来へつなげるために「CODE未来基金」を立ち上げ、若手NGOスタッフやこれから国際協力や災害支援を志す若者をサポートしています。未来基金を通じて若者がNGOで働くことができる社会を創っていきます。

発行元 (特活) CODE 海外災害援助市民センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL：078-578-7744 FAX：078-574-0702

E-mail：info@code-jp.org
HP：http://www.code-jp.org/